

宗教心について

織 田 顕 祐

一、はじめに

皆さん、こんにちは。今、采翠先生から紹介して頂きました織田顕祐と言います。どうぞよろしく。仏教会会とい
うのは、先生方、それから大学院生、それから学生諸君と一緒に、仏教学科の研究や学びを一緒にやっていく仲間が
集まっている学会です。会長は一年おきに交代するんです。たまたま、今年は順番が回ってきまして、僕が会長とい
うことです。毎年四月に新しく入って下さった方々に、会長が話をするということが恒例となっていて、それで
今日は皆さんに私が話をする事になりました。御覧のように皆さんから見ると、私は皆さんのお父さんよりは、年が
ちょっと上くらいです。実は私も大谷大学の卒業生です。四十年ほど前に皆さんのように、入学して来たんですね。
その時に私が出会った先生方は年の多い先生が大勢おられて、恐ろしい先生が多かったんです。多分、皆さんから見
ると、僕も今そんな風に見えるのだろうと思うと、ちょっと不思議な感じが致します。ついこの間まで、そちら
側に座っていたような感じがするんですけど、気がついたら反対向きになっていました。その間にそれほど時間の
変化はないように思うんだけど、とても不思議な感じがしています。

皆さんに向けて何か自分の思う事を話せという事ですから、今日は「宗教心について」という題を出しました。そ

れて、皆さんに何も手がかりの無いのも気の毒だと思って、ただ聞くだけでは申し訳ないと思って、資料を作つて来ましたから、その資料を見ながら話を聞いて貰いたいと思います。だいたい、一時間弱くらい話をします。二時には終わりたいと思つていますので、どうぞ、固くならず、ゆっくり聞いて貰つたらいいと思います。

それで、今日どうして、「宗教心について」という題を出したかという所から始めたいと思います。先程申しました通り、僕も今から四十年ほど前に、大谷大学の仏教学科に入學しました。その時、僕も皆さんと同じように十八でしたから、色々心の中がモヤモヤしていました。自分でも受け止め兼ねるような、そういう複雑な気持ちの色々と青春でしたからありました。そういう気持ちを持つて大谷大学に入つてですね、そして先生に出会い、友達に出会い、そして、仏教学科の勉強に出会い、何年か経つたわけです。今振り返ると、あの時のモヤモヤしていたものは、言葉を学び、先生に質問したりする事を通して、少しずつその形が自分の中で見えてきた、と言えはいいのでしょうか。十八才の頃には、それが何なのかという事が良く分からなくて、あっちへ弾けたり、こっちへ弾けたりして、ぶつかつてばかりいたのだけれども、そういうモヤモヤしたものが、一体何なのかということが、その時は分からなかつたけれども、今振り返ると、それはこういうことだつたんだなと思える事が少しあるのです。それで、それを僕の言葉に直すと、「宗教心」という言葉になるんです。

宗教心ということとはとても大事なことなのですが、「宗教」という言葉が、今どんなふうに見えるのかちよつと分らないものですから、その辺から今日は整理して話をしてみようかなと思つて、こういう題を付けました。私もさつき言った通り、二十数年、大学の教員を勤めさせていただいているわけですが、最初は、皆さんと同じような十八才の学生でした。皆さんが生まれた、ちよつと後くらいだと思ふんですが、オウム真理教事件という事件がありました。知つてますか？あの事件は、いわゆる宗教教団が起こした事件でした。それも仏教に関わる宗教教団が起こした、そういう事件でした。それで、その頃から、宗教という言葉が段々段々、何か恐ろしい事であつたり、

よく分らない事であったり、触れてはいけない事なのではないかというような考え・理解が、暫くの間あったと思います。

今、宗教という言葉を聞くと、皆さんはどういうイメージを持つのでしょうか？私はよく分からないけれども、宗教という言葉は、様々な尾鰭と言うのでしょうか、色んなものがくっついていて、その本質が見えにくい言葉になっているんじゃないかと思うんです。どうでしょうか？皆さん、宗教という言葉を初めて聞いた人はいますか？それでは、宗教って大事なものだなあと思う人は、ちよつと手を上げてみてくださいか？それでは、宗教って良く分らないなと思う人は、手を上げてくれますか？やっぱりね。それでは、宗教って恐ろしいものだと思う人、ちよつと手を上げてくれますか？やっぱり少しありますね。今、手を挙げてみてわかったと思いますが、宗教という言葉聞いて、ある人は恐ろしいものだと思う。ある人は大事なものであると思う。ある人は良く分からないと思う。今手を上げて貰った限りでも、それぐらいの幅があるわけです。ですから、今日は、一度、君達の理解を一べん横へ置いて聞いてもらいたいと思います。大谷大学の仏教学科へ入学して来て下さったんですから、その中心と言うか、基盤について考えてみたいと思います。そこで、宗教という言葉を手掛かりに話をしてみたいと思っています。順番を追って話をしてみたいと思って、「宗教心について」という題を出しました。題を出した意図は分かかって頂けたでしょうか。

まずは、この辺から話したいと思います。皆さんもそうだと思うけれども、私も大谷大学に入って初めて宗教ということに触れた、そういうわけではなかったんですね。それまでも宗教という言葉は聞いていました。しかしながら、改めてそれは何だろうかと考えると、良く分からなくて、私も色んな本を読んだり調べたりしました。その結果というわけではないですが、そうした事を通して今感じている事を、今日は少し整理してお話したいと思います。

二、大谷大学はどういう大学か

皆さんは、大谷大学の仏教学科に入って下さった。その大谷大学はどういう学校かということです。入学式の際に、講堂に入って、学長先生の告辞を受けました。そして大谷大学は、清沢満之という先生が、百年ほど前に東京に作った学校ですという話を聞いたけれども、覚えていますか？講堂に入ると、正面に灯りが燃えていました。その灯りの左側と、右側に、古い額が掛かっていたのですが覚えていきますか。向つて一番左側に、一名掛かっていました。あの額が、清沢満之という人です。明治時代の人で、今から百十年くらい前に、東京に大谷大学のもとになる学校を開いたのが清沢満之という人です。

プリントの二番目に、「大谷大学はどういう大学か」という事を書いておきました。「初代学長、清沢満之の開校の辞」というところを見てください。学生手帳を持つてる人は、学生手帳を出して下さい。学生手帳の二ページです。一番上に、開校の辞、と書いてあります。これが大谷大学の憲法みたいなものです。大谷大学が一体どういう学校であるかということについて、一番初めに説かれた文章です。その「開校の辞」に、初代学長、清沢満之、と書いてありますね。ちょっと読んでみましょうか。「本日は、当真宗大学の新築移転の式を挙ぐるに際し、広く朝野の諸氏の御高来を忝うし、ここに盛大なる式典を行うを得たるは、洵に私共の光荣と存じます。ついでに本学は今日ここに始めて開設したのではなく、元京都にありましたのを此処に移して校舎のみ新たに建築したものであります。その概略は真宗大学要覧について御覧下された通りであります。唯だそのだいたいについて申し上げますことは、本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、ことに仏教の中において浄土真宗の学場であります。」と、こんな風な風書かれてありますね。これが、明治の三四年に、大谷大学がどういう大学であるかという事について、初代の学長である清沢満之先生が、「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること」と、こんなふう仰った。ここに「宗

教」という言葉がありますね。ですから大谷大学は宗教学校だと、百年前にこんな風に宣言されたわけです。

だからこの宗教が恐ろしいものだとしたら、大谷大学は宗教学校だと言えは言う程、皆さんは恐ろしい学校に入ったという事になりますね。そうではないはずですよ。この宗教学校という言葉の、「宗教」という言葉は、もともとの日本には無かった言葉です。明治時代になってから新しく出来た言葉です。明治維新といって、清沢満之の少し前の時代に盛んに欧米の文化を輸入しました。清沢満之の頃は、そうしたヨーロッパなどから色々な文化が入って来て、そろそろ日本に定着しようとする時代でした。つまり日本にそれまで無かったような概念も入って来て、そして新しい言葉が出来たのです。その中に宗教という言葉も含まれていたのです。ですから、清沢満之が、宗教と言った頃には、まだ今のような色々な夾雑物というか、先入観が入っていません。言葉の意味を、新しく作っていくような時代だったんですね。だから、宗教学校なのだと仰った。そうすると、今日のプリントにも書いておきましたが、その前の所に「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること」と書かれている。そうすると、この明治三四年に、「他の学校とは異なりまして」というのは、一体どういう意味なのか気になります。そこに、清沢満之が宗教という言葉を使った時の、とても大事な意味があるわけです。

そこで日本の、学校制度とか大学の事を調べてみると、プリントに書いたような事が見えてきます。皆さんは知っているかどうか分かりませんが、明治時代になって、江戸時代とは違う時代が始まって、学校などもそれから出来るわけですね。その中で、小学校などは割と早く成立するんです。小学校中学校、そして、旧制ですから高等学校とか大学とか、色々学校が出来て来ます。それで明治三四年に、清沢満之が他の学校とは違うんだと言ったのは、一体どういう意味なのかという事を少し調べてみました。例えば明治十年に東京大学が出来ています。これは正しくは東京帝国大学といっていました。明治十年ですから、明治維新になってまだ十年目くらいです。一体、東京大学を何の為に造ったかと言えば、これは新しい国造りの為の政治家であるとか役人であるとか法律家を養成するためでした。

法律が無ければ国は動きませんから。そのように、政治家であるとか法律家であるとか官僚といった、国家を動かすような人達を養成する為に東京大学を造りました。だから、東京大学は、最初は法学部が中心です。

その次は、明治二三年、一八九〇年ですが、慶應義塾という大学が来ています。これは御承知の通り、福沢諭吉という、あの一万円札の人ですね。福沢諭吉が作った学校です。それで、福沢諭吉は何の為にこの学校を作ったかと言えば、それは日本が経済的に他の国々よりも優れた国になるようにということが中心です。それを「独立不羈」と言ったんですけれども、経済的に立派な国になるようにと、そういう意味で慶應義塾という所を開校された。だから、この慶應義塾は経済学部が中心です。そして福沢諭吉は非常な実業家でもありました。

それからその次は、明治三〇年、京都に二番目の帝国大学が出来ました。これは、京都大学です。東大が、法律家や政治家を作るのに比べて、京大は国を強くする為に科学者を育てるという事が中心になって出来た大学です。だから今でも京都大学は、化学や物理という分野が強いですね。それは、学校自身がそういう性格だからだと思います。こういう風にして当時の大学は出来ていったのです。

それから、当時はまだ大学とは言っていませんが、例えば同志社大学はその頃、同志社英学校と言っていました。新島襄の学校ですね。これは英学校ですから、外国語の為の学校だったわけです。

それから関西大学は、関西法律学校、と言っていて、これは法律家、官僚や政治家や法律家を作る為の学校であつた。京都法政学校というのは今の立命館大学ですが、法政ですから、法律と政治の学校ということです。このように、明治三四年前後で「他の学校」というのは、こういう外国語や物理や科学や政治や経済といった、様々なかたちで人間の生活を豊かにし、強い日本になる為の、人物を養成する為の学校を作り始めていた時代です。そんな事がだいたいい明治の三〇年くらいまでですから、明治維新になって、国造りを一生懸命やって、一生懸命人づくりをして、大学を作つて国を強くするといつてやつていた時代です。そういう時代の中で、清沢満之は、「他の学校とは異なりまし

て宗教学校である」という風に大谷大学の事を宣言したわけです。

三、清沢満之の「宗教」という言葉について

ですからこの、他の学校とは違って、という意味は、そのような背景を通して感じて欲しいと思います。そこで次に「宗教学校」という事について、もう少し突っ込んで考えてみようと思つてプリントに清沢満之のことを書いておきました。十年程前に清沢満之の全集が岩波書店から出しましたから、その全集を読んで、「宗教」という言葉について、何か語っている所はないか探してみました。それが今日の三番目の文章です。これは『清沢満之全集』の第七巻目の一八八ページに出てくる文章です。「御進講覚書」といつて、ある人に講義をする為のノートのようなものです。そのノートの中にこんなことが書いてあるんです。ちよつと読んでみます。「吾人一般の修養の主眼——（中略）——パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出づる至盛の要求の為に宗教あるなり。宗教を求むべし、宗教は求むる所なし。夫れ此の如きが故に、修養は自覚自得を本とす。他人の之を代覚代得すべきにあらず。（栄養もまた然り。）」という風に、メモがあるんですね。明治時代の人の文章ですからちよつと難しいですが、読めばだいたいの意味は分かりますね。清沢満之という人が、宗教というものをどのようなこととして説明しているかは、だいたい分かりますね。一緒に読んでみますか？一ぺん、声を出して。皆で一緒に読んでみましょうか？一緒にどうぞ。「吾人一般の修養の主眼」ちよつと皆、声が小さいですよ。もうちよつと大きな声で。「吾人一般の修養の主眼、パンの為、……」こんな文章です。

それで、講堂に掛けてある、清沢満之の肖像画を一ぺんゆつくり見て欲しいと思うんですが、非常に、暗い顔をした絵が掛かっています。それで、僕もずっと暗い人だと思つていたんですけど、でもこの文章を読むとちよつと面白い事を言っていますね。最後に「栄養もまた然り」とあつて、宗教は栄養と似てるよというわけです。どういう関

係があるのかと言うと、栄養とは御飯ですね。御飯は皆自分で食べて自分で消化しないと自分の力にならないですね。だから、今日は私忙しいからお母さん食べといて、というわけにはいかないですね。自分の為には自分で嚙んで自分で消化して、自分の血となり肉となりするしか仕方がない。だから、自分の事が大事であれば、御飯はちゃんと自分で食べないといけません。これが、「栄養もまたしかり」ということですね。他の人に代わって貰う訳にはいかないということです。だから、清沢満之の考えている宗教というものも、人に代わってやって貰う訳にはいかないことです。これが「他人の之を代覚代得すべきにあらず」ということの意味です。誰かお父さんやお母さんに代わって貰うとか、兄弟に代わってやって貰うという訳にはいかないということです。一人ひとり自分の事として、それに真向いにならないということです。

それではその、「宗教」とはどういうものであるかと言うと、次にずっと書いてありますね。パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、これはどういうことを並べているか、だいたい皆さん分かりますね。パンの為、これは御飯です。それから職責、人道、国家、富国強兵、功名栄華、これらは皆、とても大事な事です。例えば人が生きてく上で、御飯が無ければ生きていけないし、世の中が動く為には、こういう人道とか、国家とか、富国強兵、富国強兵はちよつと置いておくけれども、世の中がちゃんと動いていく為には、こういう事が大事でないというわけではありません。今でもそうですね。御飯が無ければ私達は生きていけないし、仕事が無ければ勿論生きていけないし、世の中が動かなければ、私達はやっぱり生きていけない。だから、こういう一つ一つの事が大事でないと云つてはなりません。大事でない訳ではないけれども、宗教はそういう事のあるのではないというわけですね。

それでは、一体何の為に宗教はあるのかと言うと、ここに、「人心の至奥より出づる至盛の要求の為」に宗教があると、こんな言葉があります。ここが、今日、僕が皆さんに宗教心ということが一番言いたい所です。これは一体どういうことを表しているか。それを考えてみます。「人心の至奥より出づる至盛の要求」というわけですから、「人

心」というのは、私達の心ですね。私達一人ひとりの心、その私達一人ひとりの心の「至奥」ですから、一番深い所です。一番奥深い所からやってくる「至盛の要求」。至盛、最も盛んな、ふつふつと湧いてくる、忘れようと思っても忘れられない、今日も湧いてくる、御飯を食べて夜寝て、明日になっても、何か自分から離れないような、そういう心の底から湧き上がってくるような強い要求。これは一体どういう要求なのか、自分でも分かり兼ねるけれども、そういうものが自分の内側にある事は皆さん感じませんか？それがどういう言葉になるのか、それが私も中々分かんなくて、それで若い時はモヤモヤしたり、苛々したり、落ち着かなかつたり、走り回ったり、何か大きな声を出したり、色んな事をしていたような気がします。自分でも上手く掴み兼ねるような、そういう、何と云うか、自分の中から滾々と湧いてくる泉のような、自分の内面的な要求。そういうものが自分の中にあるという事は、少し落ち着いて自分を振り返ってみれば、どんな人も気付くと思うんですね。

それは、美味しい物を食べても、その時は忘れていくけれども、それでは片付かない。それから自分の理想通りの道を歩んでも片付かない。就職してもお金を儲けても何かそれだけでは落ち着かないような、自分自身の分からなさと言うんですか。そういう深い感情。感情というよりもっと深い感情の根っこのようなものを、人間は持っているんだと思うんですね。でもそういう事は、考えても良く分からないし、解決もつかないから、出来る限り普段は見ないようにしておこうと思つて蓋をしているのですね。「臭いものには蓋」と言つて、そういうものには蓋をして、あたかも自分には関係無いとして、普段忘れようとしているけれども、どれだけ蓋をしてもどつかで匂つて来るでしょ？臭い物はいくら蓋しても匂つて来ますね。

僕はキムチが好きだから、家では、いつも冷蔵庫にキムチが入ってるんです。一生懸命パックで蓋をして冷蔵庫に入れてるんだけど、冷蔵庫を開けたらツーンと匂ってきます。だから、あのおいを無くそうと思つたら食べられないんですね。いくら蓋をしても、開ける度にきつい匂いがします。キムチそのものが強烈な匂いだから、蓋

しても蓋しても匂つて来る。自分の内面をキムチに例えるのは変かも知れないけれども、そういう片付かないような、深い心の働きがある事は皆さんも感じるのではないですか。

そういう事を、清沢満之は、「人心の至奥より出づる至盛の要求」という言葉で教えてくれています。それで、こういう言葉に出会ふと自分の中にもこういう気持ちがあるとか、こういう心があつたという事が分かるのではないですか？それまでは、何となくぼんやりとしていたけれども、こういう言葉に触れると、私の中にもこの言葉に当て嵌まるような、そういう強い吹き出すようなものがあるなということ、皆さん感じませんか？

僕自身は、そういう事が中々分かりませんでした。だから色んな所へ発散して、ぶつかつて叱られたりとか、先生に怒られたりとか、色々ありました。僕は、今でこそ立場、仏教会会長と言われて皆さんに向つて話しをしていくけれども、君達みたいな頃は、だいぶ跳ねつ返りでした。そういう意味では、先生に叱られてばかりいました。つまり、何て言うんでしょうか、落ち着かない訳です。だから何かスポーツをやつたら、発散出来るんじゃないかとか思っていました。それでスキーにはまつたり色んな事をしていたのです。だから、先生から見ると、「お前は落ち着かないねえ、駄目だねえ」という風な感じだつただろうと思います。

その頃僕は、まだ清沢満之のこういう言葉は知らなかった。もしかしたら聞いていたのかもしれないけれど、全く耳には入らなかつたと思います。自分の内面にある、そういう何とも言えないような湧き出すようなものが、清沢満之から見れば、それは宗教に出会いたがつている心なんだという風には全然整理が出来ませんでした。それが分からないから色んな所へそれを発散しに出掛けて行つたわけです。僕の先生は変わった先生で、そういう事は、充分御承知で笑つて見ておられたのだと思います。それでも、あまりにも僕が飛び出すんだから「もうちょっと君落ち着いたらどうかね」とそんな事ばかり言われていました。

僕の話はちよつと置いておきます。清沢満之が、宗教という言葉で表そうとしている事ですが、「人心の至奥より

出づる至盛の要求の為」に宗教というものがあるのだと言っているのです。その「至盛の要求」という要求は、人間の深い所から湧き上がってくる、何とも言い表せないような不安、落ち着かなさのようなことなのです。どんな立派な生活しても、どんな美味しいもの食べても、どんなに有名になっても、どんなに力を手に入れても、お金があっても、片付かないようなこと。自分自身に対する、分からなさというか疑問というか、そういう問いの為に宗教があるんだと言っているわけですね。だから、そういう最も盛んな要求、「至盛の要求」は、皆さん自身の言葉で言えば一体どういう言葉になるだろうか、一ぺん自分の中に、そういう言葉を探して欲しいなと思うんです。

それで、今日は采翠先生から紙を貰っているとありますから、それに自分の言葉で書いてください。僕も後で見せて貰います。そういう自分の中にある、最も盛んな要求、普段は忘れていたけれども、ふと我に返った時には、相変わらず、片付かずにあるような自分の内面の声、そういうものを言葉にして欲しいと思うんです。それはどういう言葉になるのか、皆さん一人一人違うと思うけれども、そういう皆さんの深い声の為に宗教というものがあるのだと清沢満之は言っているわけですね。

僕は去年、同じような事を人間学Ⅰの授業で一学年の人たちに話したら、色々書いてくれました。それを皆さんに紹介してもいいけれど、自分自身でそういう内面の声を言葉にして欲しいなと思います。そして後で一ぺん見せて欲しいなと思うんです。

それは要求といっても、何かを求めているというような事でなくでもいいんです。何か分からないというような要求でもいいし、何かさっぱり分からないというような事でもいいし、落ち着かないというような事でもいいんです。落ち着かないという気持ちのある人は、落ち着きたいという気持ちがあることです。同じ事の逆の表現だろうと思います。そういう自分の内面の声を自分で聞いて欲しいなあ、言葉にして欲しいなと思います。

それで、そういう清沢満之の「至盛の要求」という言葉を通して思うのは、その真ん中の、Ⅲの所に、「パンの為、

職責の為、人道の為」と色々、為為と書いてある。こういう事に触れると、私はすぐひとつのことを思い出します。それは、私達の人生の先生のような人として、釈尊という方がおられるなあ、という事です。

四、ブッタ・清沢満之そして私たち

皆さんは仏教学科ですから、宮下先生や山本先生から演習Ⅰを学び、それから一楽先生から人間学Ⅰをこれから学ばれる事と思います。これから学ぶであろう、その釈尊という人、仏陀ですね、釈迦という人。この人は、ある国の王様になるべき身分として生まれた人です。お父さんが亡くなれば自分が王位を継いで、王様になるという立場に生まれました。だからパンもあるし、仕事もあるし、それから、その国を治めて、そして奥さんもいたし、子供もいたんですね。お金も勿論あっただろうし、地位も名誉もあつただろうと思います。そういう立場に生まれて、王様ですから僕達の考える理想的な生活は多分実現出来ただろう。そういう事が約束されていたわけですね。そういうところから生まれた、ゴータマ釈尊が、ある時出家してしまう。そこを飛び出して、道を求めて行く。

ここに私は、「求道」と書きましたけれども、釈尊は一体どうして求道に進んでいかれたのか。そういう理想的な生活を捨ててまで道を求められた、その釈尊の、内面の声とは一体何だったのか。釈尊の王子としての地位から言えば、いずれ有名になるとか、既にもう有名だったかもしれないけれども。お金持ちになるとか、美味しい物を食べるとか、そういう事はほつといても手に入るような身分だったと思うんだけど、それを辞めてまで何が問題だったのか。そういう所に、私達の仏教学の一つの原点みたいなものがありますね。だから清沢満之の言う、「人心の至奥より出づる至盛の要求」という言葉と、釈尊が王子の立場を捨ててまで出家して行かれたという内面とは響き合っているように思うんですね。その釈尊から二千五百年、ずっとそのように人間の一番深い声を聞きながら、それが何であるかを教える仏教ということがあり、そして私達が一体どういふものであるのかという疑問はずっと今日まで続

いている。

だから、もう一ぺん繰り返して言いますと、仏教学科の、その一番先つちよにある釈尊、仏陀という人の行動・行い、考えたこと・感じたことと、ここ百年くらいですけれど、大谷大学の最初の学長先生であった清沢満之先生が宗教という言葉で語っている事とは、響き合っているように僕は思うんですね。繋がっているように思う。その清沢満之の言葉は、皆さんの内面とも響き合っているんじゃないかと思うんですね。「人心の至奥より出づる至盛の要求」という、最も深い所にある自分自身の声。それがどういう声なのか、一人ひとり自分の言葉にして欲しい。何回も同じ事を言っていますけれど、その事が皆さん自身の学びの一番元にあるものだと言いたいのです。

そしてこれを、僕は、「宗教心」という風に言ってみたいんです。つまり、一番深い所にある内面の声、それは例えば寂しき、何をやっても寂しいなあという気持ちなのかもしれない。何をやっても分らないなあという、落ち着かないという、そういう気持ちなのかもしれない。そういう分からなさでもいいし、結局人間は死ねば同じじゃないか、意味なんかあるのかという、そういう問いかもしれない。そういう自分の内面から決して消えないような自分身の内側の深い声。そういうものに応えるものが宗教であると、清沢満之は言っているわけですから、私達のなかに起こっているそういう心が「宗教心」であると清沢満之は教えている、こんな風に私は言ってみたいですね。

「宗教心」というと、何か前向きに求めるようなそういう風に見えるかもしれないけれども、そうではなくて、自分が一番深い所から湧き上がってくるような、解決出来ないような声。そういう声を、清沢満之は宗教を求める心なんだと言う。それは、釈尊も求めたし、清沢満之も求めたし、私達も求めるような、そういう、どんな人にもあるような内面だと思っんですね。今、「宗教心」という言葉をそのまま聞くと、何かを信じる事、例えば「鯛の頭も信心から」という昔の諺にあるような、何かそういった信じる事とか、儀式だとか、そういう事をすぐに思い浮かべるかもしれませんが。しかし、このように少し中身を尋ねていくと、私達自身の中にあるような、そういう一番深

い声を宗教心と言うのであるということです。それは何と言うか、分きたいという声かもしれないし、分からないという否定的な顔をしているかもしれない。どんな顔をしているか一人一人違うと思います。違うと思いますが、美味しい物を食べたり、有名になったりお金を儲けたりぐらいいでは片付かないような、そういう内面の深い声を、「宗教心」と言うのではないかと思うんですね。

それで、僕は、そういう事が分からなかったから、色んな所でぶつかりながら学んでやっと最近、自分のあの時の寂しさとか虚しさ、分からなさみたいなものは、こういう事だったんだという事が、少しだけですけれど整理が出来てきた。だから、敢えて今日は、この「宗教心」という言葉を、そんな風に皆さんに感じて欲しいと思って話をしました。この言葉の持つているイメージにごまかされないで、この言葉が出てきた元にもどって考えてみました。その一番のきっかけは清沢満之先生だけでも、それがもっと深い所で釈尊まで繋がっている。もしかしたら釈尊以前にも繋がっているのかもしれませんが。そして私達は、その一番の先端で今生きているという、そういう事をずっと貫くような、一つの深い心と言うんですかね。そういうものを仏教学科の原点にしたいと思って、今日は最初にこんな話をしました。

それで、最後の所に、「それを自分の言葉で表現すると」と書いておきました。寝ても覚めても片付かないような、ふつと気がついたら、やっぱり働いているというような、そういう皆さん自身の内面の声がどういう言葉になるのか、それを今日は聞かせて欲しいと思います。楽しみにしていますので、是非そういう自分自身の声をここに書いて欲しいなあと思います。最後に、「仏教学科で学ぶ事」と書いておきましたが、今までに話して来たような意味です。仏教学科で何を学ぶか、色んな可能性があるから、色んな風に自由に学んでくれていいんです。それでもやっぱり僕は、一番深い所で動いているような、自分自身に対する問いというんですか、そういう事が何をするにしても一番深い所にあるのではないかという事を思います。僕はずっと気がつかなかったもんですから、最近ちょっとそういう事が分

かった為に、皆さんにヒントとして今日話をしたというわけです。

今、だいたい二時ですから、話はこれぐらいで終わります。それでは清沢満之の言う、「至盛の要求」、つまり自分の一番深い所から湧いてくるような、滾滾と湧いてくるような、そういう心の姿は、皆さんのどんな言葉なのかという事を自分の内側に尋ねてみて、それを書いて欲しいと思います。読ませてもらうのを楽しみにしていますので、飾らずありのままに書いてみてください。それでは、話は以上で終わりたいと思います。どうも、静かに聞いてくれてありがとうございます。（本稿は、二〇二二年四月十九日（木）に尋源講堂で行なわれた講演を加筆修正したものである。）